

平成29年度 第1回 京都市市民活動総合センター運営委員会  
議事録

日時：2017年6月27日（火）18：30～20：30

場所：京都市市民活動総合センター ミーティングルーム

（五十音順、敬称略）

出席：可児 卓馬 （公益財団法人京都地域創造基金 事務局長）  
神田 浩之 （京都府府民生活部府民力推進課 府民力推進課長）  
小暮 宣雄 （京都橘大学 現代ビジネス学部 教授）\*座長  
小林 明音 （NPO 法人京都景観フォーラム 事務局）  
杉本 星子 （京都文教大学 総合社会学部 教授）  
鈴木 康久 （京都産業大学 現代社会学部 教授）  
高嶋 加代子 （NPO 法人京都コミュニティ放送 理事/事務局長）  
竹田 明子 （公益財団法人京都市ユースサービス協会 事務局事業担当チーフ）  
菱川 貞義 （株式会社大広 275 研究所 所長）  
平井 嘉人 （平井株式会社 代表）  
福島 重典 （京都御池税理士法人 税理士）  
山口 明裕 （京都市文化市民局地域自治推進室 市民活動支援課長）  
森野 茂 （アルファトラベル株式会社 代表）

欠席：大石 尚子 （龍谷大学 政策学部 准教授）  
河西 実 （NPO 法人フェア・プラス 事務局長）  
日下田 貴政 （京都新聞社 人事・法務部長代理）

## 1. 概要説明

委員任期が改まり、新規に就任した委員もいるため、運営委員会の位置づけ、委員および事務局の自己紹介、市民活動総合センターの概要説明を行った。

## 2. 平成28年度事業報告

事業概要について、平成28年度事業報告に基づいてセンター長より説明を行った。

（委員）

- ・ポータルサイトは、自団体でもよく利用している。しみセンが更新を頑張ろうとしているのもわかる。団体が情報を入力する際にうまく盛り込めない情報もあるが、素材を提供すると、それらを引き出しながら最適な形にしてくれているように感じている。
- ・相談統計の認証相談の数が、27年度に比べて28年度にかけて大きく減っているのにはどのような理由があるのか。

(事務局)

- ・NPO 法人の認定数、認証数の数は大きく変化していない。この数字の落ち込みについては、相談の記録方法の共有がスタッフ間で不十分で、記録漏れなどが起きたことは要因の一つと考えている。

(委員)

- ・センター来館者が毎年なだらかに減少しているが、どのように考えているか。

(事務局)

- ・市民活動全体的に、活動の中心世代が入れ替わりつつある。当センターの利用者層でも見られる傾向であり、活動を終える層が使用しなくなるなか、新しい層の利用をひきつけきれていないということはあると思われる
- ・また、相談内容によっては当センターに来なくてもウェブ検索等で間に合うようになるなど、社会全体として発信される情報が増えているという側面もあると思われる。

(委員)

- ・しみセンとして、何を課題と考えて、どうしたいと考えているか。自分たちの強みや弱みは何かを理解しているか。2年前は寄付社会を作りたいという意識が強く感じられ、そのためのプログラムにも取り組まれていたと思う。

(事務局)

- ・京都、しみせんというミクロの視点ではなく、市民活動全体を見たときに認証数は非常に少なくなっている。認証は鈍化する一方、解散数や認証取り消し数は増加傾向にある。20年前に定年退職をしてNPOを始めた人たちが、年齢的なことや後継者がいないことを理由に活動をやめるということも起きている。
- ・しみセンでは、任意団体、一般社団・財団など行政としては関心外の団体についても相談対応をしている。NPO 法人の認証認定相談数ということでいえば鈍化傾向はある。現実的には、NPO 法人以外で、今まで私達が支援スキルとして持っていなかった一般社団・財団も公益の担い手としてどのようにかわり、支援していくのかということを考えていく必要はある。
- ・法律の変化、活動層の変化という背景はある。団体が会議などでしみセンを使うという使い方は従来通りあるが、個人がしみセンに来なければできないということが減っているという変化もある。ひとまち交流館全館でも見られる傾向。
- ・人数が減っていることに対して、利用者数を増やしていく努力はしていく。活動者に対してのアプローチだけではなく、潜在的関心層、潜在的活動層にどうアプローチするかということを課題として認識している。しみセンのソフト機能は重厚だし、ニーズもあると思っている。しかし、ハード機能としてのニーズはどうかというと、努力は必要である。その取組みとして、今年12月にひとまち交流館始まって以来のチャリティコンサートを開催予定。

(委員)

- ・しみセンの来館者数が1日平均285人というは多いのか、少ないのか。他県、他市のセンターと比較してどうなのかという検討をしてもよいのではないか。潜在層に関して、一般社団法人などに対するアプローチ方法が手さぐりであるということ、また地域コミュニティに対してどうアプローチするのかということも求められているのではないか。京都市としてはそれぞれいきセンがあるが、小規模多機能自治ということが言われるなかで、講座などにそうした視点を取り入れていくこともできるのかもしれないし、一般社団法人などが社会的活動を展開していくためのアプローチの仕方を情報として提供してくという視点もあるかも知れない。
- ・しみセンが、こうしたセンターの中でも日本で一番だとは思っている。そうした中での取組みを工夫していけるとよい。

(委員)

- ・しみセンの活動としてコーディネートも大切だと思うが、28年度の報告ではコーディネートに関する部分が少ないように思う。それにはなにか理由があるか。
- ・NPO法人以外の市民団体とのつながりづくりや対応についてはどのように対応してくか。

(事務局)

- ・28年度はポータルサイトの構築と運用開始に注力した体制をとったため、コーディネートについては従来通りの力が及ばなかった部分がある。コーディネートを複数名の体制を持てるときは、掘り起しまでできるが、1人体制の場合、他スタッフの協力を得ながら実施しても、依頼があったものを成立させるまでで精一杯になる。
- ・現状では、事業コーディネートとしては、いきいき市民活動センターからのコーディネート依頼をセンター間連携という視点から取り組むケースもある。ボランティア・コーディネートとしては、引き続き、ユースサービス協会さん、学生 Place+さんと連携した、学生へのボランティア機会提供という形で取り組んでいる。

(事務局)

- ・今回の数字の低下については、職員間でも分析を行った。その結果、「相談」「対応」という部分のカウンターの仕方が十分に共有されていなかった。日常業務としてのケアレスミスではあるので、この部分は改めて共有を進めたい。
- ・祇園祭ごみゼロ大作戦のボランティアコーディネートは、きょうとNPOセンターとして動かしてはいるものの、京都市もかかわっており、ボランティア機会の提供というしみせん業務にリンクする部分の扱い方など、地域自治推進室とも相談をしながら進めており、29年度はしみせん業務として扱うことになっている。

(委員)

- ・ユースサービス協会さんとのボランティアチャレンジプログラムは、どのようなもの？

(事務局)

- ・学生 Place+さんと市民活動総合センターで取り組んでいたプログラムに、平成28年からは新たにユースサービス協会さんにも協力をいただいたもので、内容としては従来から取り組んでいるもの。大学生にボランティア機会を提供するプログラムで、しみセンは受け入れ団体のコーディネートをやっている。

(委員)

- ・授業で学生と一緒にしみセンにきた。センター長から概要を話してもらった後、学生を4つに分けて地下1階、2階、3階、4階それぞれに見学や話を聞かせてもらったりした。その結果、全館での連携などまた可能性があるのではないかと思う。

### 3. 平成29年度事業方針

事務局より説明を行ったのち、意見交換を行った。

(委員)

- ・職員の交代に伴って必要な人材育成に注力してもらえればと思う
- ・講座の内容について、NPOの最初の一步や潜在層への働きかけに注力するという事は昨年度の報告にも記述があり、方向性としては理解している。今回の講座のプランでも入門的なものは増えているように思う。ニーズに合わせてということだと思うが、そのニーズはどのように引き出しているのか。

(事務局)

- ・活動をさらに進めたい団体には、資金調達や認定にむけた講座を実施。また、活動に行き詰ってきたが立て直すのか、解散するのかという、活動してきたからこそその悩みも、相談としては入ってきているので、それをもとに講座を組み立てている。
- ・入門編といっても応援者をつくるという視点からは、NPOをどう活用すればよいかという視点での講座実施を行う予定。7月に開催予定の講座では、子育て中の母親を対象として、「子どもの夏休みにいける」という切り口で、NPO主催の事業・団体紹介を行う。これまで「NPOとはこういうもの」という切り口では呼べなかった人たちを呼ぶために切り口を変えている。

(委員)

- ・NPOってなんですか？という講座は、対象は学生でもよいのか。

(事務局)

- ・もちろん学生も対象になる。ただ、各回の対象層として学生以外を設定することもあるので、毎回学生に受け取りやすい切り口になるかどうかはわからない。学生向けとしては出張講座などで、高校に出向くなどの対応もしている。

(委員)

- ・しみせんやNPOをどううまく使うかという視点でみてもらうことが、潜在的な活動層を掘り起こすことにつながる。市民活動について勉強するとか、公益的な気持ちをもつというスタンスではなく、日常的な関心に寄り添う形は良いと思う。

(委員)

- ・ポータルサイトが新しくなったのに、HPアクセス数が減っているのはなぜなのか。また市民活動総合センターで検索すると、京都市情報館のほうが、しみせんよりも出てきやすい。ここは、しみせんが上位に上がるようにしたほうがよいのでは。

(事務局)

- ・HPアクセス数が減っているように見えるが、HPとポータルサイトは別のもので、カウントも別にとっている。HPと呼んでいるのは、ひとまち4センター合同のフォーマットで使用しているもので、従来から運営しているもの。このHPの使い勝手がしみせんがしたいことと合わなかったので、28年度に新しくポータルサイトを立ち上げた。現在、HPとポータルサイトを並行して運営しているが、情報発信の主力はポータルサイトにおいている。ポータルサイトへのアクセス数は伸びており、その一方でHPへのアクセス数が減少するのは見込んでいたこと。京都市情報館の情報との検索での出方については、改めて確認しておく。

(委員)

- ・報告書の内容など成熟度が高く、事業内容もよくねられていると思う。そもそも、しみせんは何のために作られたのか、その目的に照らして活動の成果は何で図るのが良いのか。

(事務局)

- ・しみせんは、条例施設であり、仕様書に基づいたプロポーザルの結果、KNCが採択されている。
- ・市の仕様書では、潜在的関心層が活動層になっていくことが意図されている。しかし、潜在的関心層が、活動層ではなく支援者になってくためには何が必要かも考えていかないと、市民活動自体が先細っていく。市民活動を取り巻く状況の変化に対応して、必要なことを、京都市とも十分に議論をしながら進めている。そうした積み重ねの結果、次の指定管理の仕様書に、これからの市民活動支援に必要な要素を提案することが必要だと考えている。
- ・数字の結果だけが成果とは思っていない。しみせんがあることでなんとなく社会が良くなっていく。「社会的基盤組織」としての価値を発信したい。私たち自身が、何を価値と考えて、成果として共有するかはまだ議論を深める必要があると考えている。

(京都市)

- ・市民活動の拠点施設としてひとまち交流館があり、そのなかに市民活動総合センターがある。京都市は、市直営でなく、現場により近い団体に運営をしてもらうことで、効果的な運営を図ろうとしている。

(委員)

- ・方針について中身もよく考えられている。潜在的関心層への呼びかけとして、子育て中の母親のアプローチの仕方などとても良いと思う。市民活動への入り口メニューのバリエーションをどれだけ増やせるか、しみセンにくるといいうハードルをいかに下げるかという視点が必要だと思う。最初の接点があれば、それをきっかけに関係を深めていくことができる。
- ・ポータルサイトについては、トップページのコンテンツをもっとアイコン風にしてもよいのでは。タッチポイントをどう増やすかという視点からは、「ヤマハコンサート方式」も考えられる。市民に記者としていろんな公益活動に参加してもらい、レポートをしてもらう。提出してもらって、きちんと直して、発信する。プロの記者の技術が身につくなどすれば、関心を持つ学生もいるだろう。
- ・他には、「NPO 事務局長一日体験 プログラム」とか。
- ・企業の社内セミナーへのアプローチもしながら、入り口をこちらから持っていくことを考えてみてはどうか。

(委員)

- ・府のパートナーシップセンターは、しみセンの予算の3分の1。今日の話は、府のパートナーシップセンターにも突き付けられていると感じた。同じような課題があることもわかったので、一緒に考えていくことができればよい。
- ・一時的に数字が落ち込みむことはあるだろうが、この予算規模のなかでかなり多くの事業を行い、よくこれだけ集めていると思う。人口減少社会のなかで、右肩上がりになっていくこと的前提が難しいとも思う。

(委員)

- ・「潜在的な」存在が「お母さん」「学生」といった言葉で明確化された。潜在的なことをターゲットにするのは重要なことなので、ターゲットをより明確に発信することは大切。
- ・これまでは、地域を支援するのではなく、とびぬけた人たちを支援してきた。しかし、今は地域をどう支援するかというところに全体的にシフトしつつある。府のセンターも一緒に勉強会をしたり、中間支援ネットワークの仲間もいれて勉強会をすると、視点などに幅が出るのでは。
- ・資料として、新聞の連載記事を付けてくれているが、これがとてもよい。書籍化したらどうですか。KNCの連載記事と同じページで紹介されているNPOをまとめる書籍も出せると面白いと思う。
- ・コンサートは、将来的にはしみセンがやらなくても、市民活動への寄付を集めるコンサートとして団体が独自にできるようになるとよい。

(委員)

- ・チャリティコンサートをしようとしたきっかけは？

(事務局)

- ・いろんな人に、ひとまち交流館やしみセンに来てもらうことが大切だと考えたから。関心を少し持

った人に対しては、参加人数にかかわらず、入門講座は開催しなければならない。しかし、その入門講座に来るような人たちの掘り起こしも一緒にしておく必要があると考えて、参加しやすい内容で考えた。コンサートの前段でちょっと市民活動の話をできればいい。

(委員)

- ・10年前と今ではNPOの状況はずいぶん変わった。10年前は、自治会が地域の課題を受け止める力があつたが、今はそこが弱くなっている。いまもっとNPOが必要とされていると思う。なおさら、しみセンやNPOのことを知ってもらう必要性が高まっている。

以上